

上富良野町教育支援センター MinaMinaの取り組み



2025年
臨床心理士
松田 剛

1

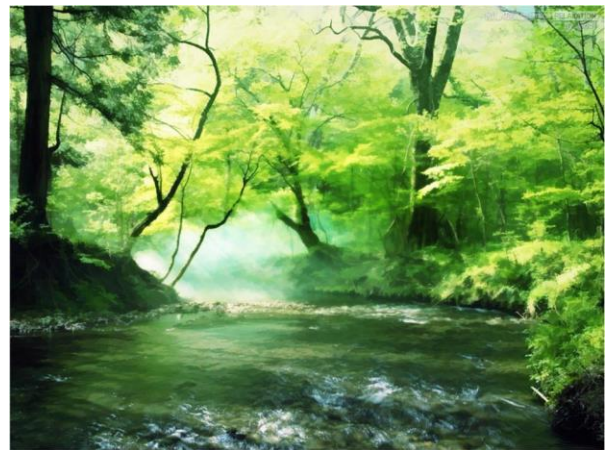
I. 「程よい距離感で居心地がいい」
～居心地の良い居場所とは～

II. 子どもを中心とした「信頼できるつながり」
～大人同士のつながりについて～

III. 自分らしさを取り戻していく過程
～学校に戻すことが目的ではない～



I. 「程よい距離感で居心地がいい」 ～居心地の良い居場所とは～









居心地の良い居場所づくりには、
発達環境デザイン研究所「SOLODY」さんの協力を得た。



利用者同士の視線が届きにくい、
「程よい距離感で居心地が良い」空間。



スタッフは、私も含めて4人。
内3人が心理と教員免許の有資格者、
1名が保育士の有資格者



素晴らしいスタッフにも恵まれた。

教育長をはじめ、教育委員会の人たち、学校関係者が
それぞれの立場で精いっぱい支えてくれている。

おかげ様で2023年6月のスタートから、
現在**22名（小2～中3：内小学生5名）**の登録をい
ただいている。
（上富良野町の人口は約1万人）

毎日、午前と午後に顔を出してくれる子もいれば、
週1回1時間程度、予約をしてくれてくれる子もいる。

松田と一緒に勉強をするために来る子もいれば、
スタッフとゲームや鬼ごっこをして時間を過ごす子、
1人で絵を描いたり、マンガを読んだりしている子もいる。

「行ってきます！」と言って
MinaMinaから登校する子も。

利用の仕方はその子次第。
異学年のグループが自然にできることもある。



Ⅱ. 子どもを中心とした、「信頼できるつながり」 ～大人同士のつながりについて～



Mina Mina
上富良野町教育支援センター
上富良野町教育委員会 第6版 2024年10月 ver.6

関係機関とつながる活動

アセスメント

- ・通常学級における支援が必要な児童・生徒のアセスメント。
 - サポートミーティングによって必要とされたケースをアセスメント。
- ・読み書きスクリーニング検査（小学校）
 - 小2後半～小3前半に、全体に対する「読み書き」スクリーニング検査を行う（小1に行ったり方もあり現在リサーチ中）。
 - スクリーニング検査の結果を受けて、必要に応じて検査する。
- ・必要に応じて個別介入（ゼミントレーニング、算数領域のトレーニング、ライントップの練習など）を行う。
- ・クラスの状況の把握
 - QU検査（WEB版？）を実施。担任の先生方と児童の様子を共有。
 - 小中連携プログラムの一環として、新中1生のクラス編成に生かす。
- ・就学時健診等の未就学児のアセスメント
 - 発達支援センター・通所の年長児、2次検査におけるWISCなど。
 - 必要に応じて発達支援センターで年中児の新規K式。
 - 各子ども園や発達支援センターにおける行動観察および情報交換、コンサルテーション。
- ・特別支援やことばの教室に在籍している小6児のアセスメント
 - 中子における支援の方向性の参考にするために、随時アセスメントを受けて、世界を対象にする。

集回への直接介入

- ・サポートグループアプローチ
 - 友人からのサポートが育ちと思われる小学生への介入。
 - 必要に応じて友人、保護者、担任、発達教師等と協力して行う。
- ・WOWWプログラム
 - 「いらいとこ探し」や「スクリーニング」を利用した小学生のクラス全体への介入。
 - 小6に行う場合は、小中連携プログラムの一つとして行う。
 - 必要に応じて担任と協力して行う。
- ・心理教育
 - 保護者の先生方と協力して、小中、それぞれの学年（クラス）における心健教育的な活動の企画・実施（発達教師と共同）。
 - 小学校から中学校まで一貫したプログラムを作成し、先生方の活動後プログラムとして引き継がれるような形を作る。

子どもを中心とした「信頼できるつながり」

サポートミーティング →小学校

サポートミーティングにて情報の整理

- ★1～2回/月程度（学級の状況に合わせて実施）。
- ★特別支援 Co と支援センター職員、その他関係者（必要に応じて）でサポートミーティングをする。
- ★実際の状況も参考に検討する。
- ★下記のように情報を整理。必要に応じて支援センター職員が担任に話しかけて関係者に情報共有して落着かす。
- ① 担任が特別支援 Co に届いているケースを確認。
- ② 特別支援 Co が認めるケースをサポートミーティングで検討。
- ③ 必要に応じて、7/13/6、約40分、行動観察等の対話を検討。
- ④ ③をふまえて子どものニーズに合わせた配慮や工夫。
- 支援シートの工夫。
- 支援関係の書類を、学校、支援センター、教育委員会等で共通のものに共有できるように工夫できないか？
- 教室での合図の配慮等の検討。
- 筆記用・補助用や教材、基盤の配置、漢字の書き方、声のかげ方などの工夫。
- 担任の先生や保護者と可能な配慮や工夫の検討。
- 中子と女子、休んでいる子、登校をしがちな子などに対する個別介入の検討。

関係者面談（仮名例） →中学校

関係者面談（仮）にて選択肢の整理

- ★年度内欠席累計20日～30日程度（その状態に合わせて進捗調整）に実施。高学年学校になりそうなるケースが対象。
- ★保護者、担任の先生、支援センター職員、その他必要に応じて関係者（必要に応じて）が1時間程度の関係者面談（仮名例）をする。
- ※案の中では…
 - ★「学校に動かしからず進捗まで全部行く」以外の取りうる選択肢を整理する。
 - 学校に動かしからず進捗については、今まで通り各学年や担任、通所、保健室等、学校でできることを、学校の先生が表明する。
 - 支援センター、その他についての選択肢は松田（七少職員）が表明する。
- ★必要に応じて（担任の先生やご家族が希望すれば）、長期休み等に関係者面談を改めて経過を調う。
- ★関係者面談であげられた選択肢について、保護者の判断でタイミングを見計らって保護者から本人に伝える。
- ★部活などの先生の都合や保護者の仕事の都合等で時間がない場合は、学校は学校で、支援センターは支援センターでそれぞれの選択肢を別々に保護者に説明する。
- ★関係者面談の時間調整のための調整は、今のところ松田（七少職員）が行う。

教員、保護者向けの研修活動

- ・不登校、自殺予防、特別支援などに関する教職員向けの研修の企画・運営。
- ・ストレスマネジメント、不登校などに関する保護者向けの研修の企画・運営。

個別的介绍

- 下記の活動の場所はケースによって、
- ・支援センター、
 - ・学校、
 - ・自宅（自律を促す活動のみ）
 - ・社教などその他、
- などの中から最適な場所を選ぶ。

関係者へのかけがえ

- なにか学校へ行けない子どもたち、いわゆる「居残り」をしかかえる子どもたち等の保護者に対するかけがえ。
- 家庭訪問や個別介入をすることで、関係者に子どもたちを促す。
- 状況によって、親子、夫婦、家族全体での合同でかけがえを行うことも検討。
- 保護者が変わることで子どもも変わることが多い事実も、見。

子どもへのアフレクシーやかけがえ

- 「仲間」作り、上記の保護者とのかけがえを優先。本人が担当、子ども担当による併行した介入。本人によって検討する。
- 状況によって子ども本人に対する関係者介入、アフレクシーや関係者、関係者面談、関係者面談、各種技法を使った介入を行う。
- 言語で表現できずとも子どもであれば、言葉によるかけがえを行う。

自律を促す活動

- その子の興味に合わせた各種体験活動などを通して、なるべく外に出て家族以外の人と話す機会を持つ。
- 誰かと一緒に「変い」「やりたい」という気持ちを満たさず、「達成感」を得る経験。
- 外に出て歩くことによる体力維持。
- 数学（算数）、英語、漢字などの基礎的な学習活動を通して、「学ぶ喜び」を味わう。
- 基礎的な学習活動を通して、後進後の学習面での負担軽減を目指す。

子どもを中心とした 信頼できる「つながり」

サポートミーティング →小学校

関係者面談（仮名称） →中学校

サポートミーティングにて情報の整理

- ★ 1～2回/月程度（学校の状況に合わせて）実施。
 - ★ 特別支援 Co と支援センター職員、その他関係者（必要に応じて）でサポートミーティングをする。
 - ★ 客観的な情報も参考に検討する。
 - ★ 下記のように情報を整理。必要に応じて支援センター職員が担任に話しかけて臨機応変に情報共有して補充する。
- ① 担任が特別支援 Co に困っているケースを相談。
 - ② 特別支援 Co が選んだケースをサポートミーティングで検討。
 - ③ **必要に応じて、アセスメント、加療、行動観察等の対処を検討。**
 - ④ ③をふまえて子どものニーズに合わせた配慮や工夫：
- ・ 支援シート類の工夫
→ 支援関係の書類を、学校、支援センター、教育委員会等で共通のものを共有できるように工夫できないか？
 - ・ 教室での合理的配慮等の検討
→ 筆記具・補助具や教材、座席の配置、漢字の覚え方、声のかけ方などの工夫
 - ・ 担任の先生や保護者と可能な配慮や工夫の検討
休みがちの子、休んでいる子、登校をしぶる子などに対する個別的介绍の検討も含む。

関係者面談（仮）にて選択肢の整理

- ★ 年度内欠席累計20日～30日頃（ケースの状態に合わせて適宜調整）に実施。長期不登校になりそうなケースが対象。
 - ★ 保護者、担任の先生、支援センター職員、その他必要に応じて可能であれば関係者が1時間程度の関係者面談（仮名称）をする。
- 面談の中では…
- ★ 「学校に朝から放課後まで全部行く」以外の取りうる選択肢を整理する。
 - 学校に關係する選択肢については、今まで通り各学年団や担任、通級、保健室等、学校でできることを、学校の先生が直接説明する。
 - 支援センター、その他についての選択肢は松田（仮称職員）が直接説明する。
- ★ 必要に応じて（担任の先生やご家族が希望すれば）、長期休み等に関係者面談を開いて経過を追う。
 - ★ 関係者面談であげられた選択肢について、保護者の判断でタイミングを見計らって保護者から本人に伝える。
 - ★ 部活などの先生の御都合や保護者の仕事の御都合等で時間がなかなか取れない場合は、学校は学校で、支援センターは支援センターでそれぞれの選択肢を別々に保護者に説明する。
 - ★ 関係者面談の時間設定のための調整は、今のところ松田（仮称職員）が行う。

サポートミーティング →小学校

サポートミーティングにて情報の整理

- ★ 1～2回/月程度（学校の状況に合わせて）実施。
 - ★ 特別支援 Co と支援センター職員、その他関係者（必要に応じて）でサポートミーティングをする。
 - ★ 客観的な情報も参考に検討する。
 - ★ 下記のように情報を整理。必要に応じて支援センター職員が担任に話しかけて臨機応変に情報共有して補充する。
- ① 担任が特別支援 Co に困っているケースを相談。
 - ② 特別支援 Co が選んだケースをサポートミーティングで検討。
 - ③ **必要に応じて、アセスメント、加療、行動観察等の対処を検討。**
 - ④ ③をふまえて子どものニーズに合わせた配慮や工夫：
- ・ 支援シート類の工夫
→ 支援関係の書類を、学校、支援センター、教育委員会等で共通のものを共有できるように工夫できないか？
 - ・ 教室での合理的配慮等の検討
→ 筆記具・補助具や教材、座席の配置、漢字の覚え方、声のかけ方などの工夫
 - ・ 担任の先生や保護者と可能な配慮や工夫の検討
休みがちの子、休んでいる子、登校をしぶる子などに対する個別的介绍の検討も含む。

関係者面談（仮名称）

→中学校

関係者面談（仮）にて選択肢の整理

★年度内欠席累計20日～30日頃（ケースの状態に合わせて適宜調整）に実施。長期不登校になりそうなケースが対象。

★保護者、担任の先生、支援センター職員、その他必要に応じて可能であれば関係者が1時間程度の関係者面談（仮名称）をする。

面談の中では…

★「学校に朝から放課後まで全部行く」以外の取りうる選択肢を整理する。

→学校に關係する選択肢については、今まで通り各学年回や担任、通級、保健室等、学校でできることを、学校の先生が直接説明する。

→支援センター、その他についての選択肢は松田（センター職員）が直接説明する。

★必要に応じて（担任の先生やご家族が希望すれば）、長期休み等に関係者面談を開いて経過を追う。

★関係者面談であげられた選択肢について、保護者の判断でタイミングを見計らって保護者から本人に伝える。

★部活などの先生の御都合や保護者の仕事の御都合等で時間がなかなか取れない場合は、学校は学校で、支援センターは支援センターでそれぞれの選択肢を別々に保護者に説明する。

★関係者面談の時間設定のための調整は、今のところ松田（センター職員）が行う。

Mina Mina
上富良野町教育支援センター
上富良野町教育委員会 第6版 2024年10月ver.1

関係機関とつなげる活動

アセスメント

- ・通級学級における支援が必要な児童・生徒のアセスメント。
 - サポートミーティングによって必要とされるケースをアセスメント。
- ・読み書きスクリーニング検査（小学校）
 - 読み書き検査が1学年前に、全体に対する「読み書き」スクリーニング検査を行う小1に行ったりも有り現在（リサーチ中）。
 - スクリーニング検査の結果を受けて、必要に応じて精査する。
 - 必要に応じて個別介入（ビジョントレーニング、音韻処理のトレーニング、フライトタッチの練習など）を行う。
- ・クラス状況の把握
 - JQ検査（WEB版？）を実施。担任の先生方と児童の様子を共有。
 - 小中連携プログラムの一環として、新中1生のクラス編成に生かす。
- ・就学時健診等の未就学児のアセスメント
 - 発達支援センター通級の年次回、2次検査におけるWISCなど。
 - 必要に応じて発達支援センター年中児の新設K式。
 - 各子ども園や発達支援センターにおける行動観察および情報交換・コンサルテーション。
- ・特別支援やことばの教室に在籍している小6児のアセスメント
 - 特別における支援の方向性の思考をするために、病院等で検査を受けていない児童も対象にする。

集団への直接介入

- ・サポートグループアフォーチ
 - 友人からのサポートが有効と思われる小学生への介入。
 - 必要に応じて友人、保護者、担任、発達教師等と協力し行う。
- ・wowwプログラム
 - 「いいとこ褒め」や「スクーリング」を利用した小学生のクラス全体への介入。
 - 小6に行う場合は、小中連携プログラムの一つとして行う。
 - 必要に応じて担任と協力して行う。
- ・心理教育
 - 保護者の先生方と協力して、小中、それぞれの学年（クラス）における心理教育的な活動の企画・実施（発達教師と共同）。
 - 小学校から中学校まで一貫したプログラムを作成し、先生方の活動後プログラムとして引き継がれるような形を作る。

子どもを中心とした信頼できる「つながり」

サポートミーティング →小学校

サポートミーティングにて情報の整理

- ① 2週間月程度（学校の状態に合わせて）実施。
- ★ 担当支援 Co と支援センター職員、その他関係者（必要に応じて）でサポートミーティングをする。
- ★ 参加可能な関係者に参加を呼び掛く。
- ★ 1ヶ月以上経過した情報整理、必要に応じて支援センター職員が担任に話し合いで情報共有して精査する。
- ② 担任が特別支援 Co に抱えているケースを相談。
- ③ 特別支援 Co が抱えたケースをサポートミーティングで検討。
- ④ 必要に応じて、**方針、目的、方法、行動観察等の対応を検討**。
- ⑤ ③もふまけて子どものニーズに合わせて配慮や工夫。
- ・ 支援手段の工夫
 - 支援関係の整理、学校、支援センター、教育委員会等と共通のものを共有できるように工夫を多めに行う。
- ・ 教室での合理的配慮の実施
 - 筆記具、補助具や教材、墨書の配置、漢字の読み方、声かけの仕方などの工夫。
 - 担任の配慮や保護者と可能な連携や工夫の検討。
 - 担当が担当、既に入っている、支援をしようとする子どもに対する個別介入の検討も含む。

関係者面談（仮名称） →中学校

関係者面談（仮）にて選択肢の整理

- ★年度内欠席累計20日～30日頃（ケースの状態に合わせて適宜調整）に実施。長期不登校になりそうなケースが対象。
- ★保護者、担任の先生、支援センター職員、その他必要に応じて可能であれば関係者が1時間程度の関係者面談（仮名称）をする。
- 面談の中では…
- ★「学校に朝から放課後まで全部行く」以外の取りうる選択肢を整理する。
- 学校に關係する選択肢については、今まで通り各学年回や担任、通級、保健室等、学校でできることを、学校の先生が直接説明する。
- 支援センター、その他についての選択肢は松田（センター職員）が直接説明する。
- ★必要に応じて（担任の先生やご家族が希望すれば）、長期休み等に関係者面談を開いて経過を追う。
- ★関係者面談であげられた選択肢について、保護者の判断でタイミングを見計らって保護者から本人に伝える。
- ★部活などの先生の御都合や保護者の仕事の御都合等で時間がなかなか取れない場合は、学校は学校で、支援センターは支援センターでそれぞれの選択肢を別々に保護者に説明する。
- ★関係者面談の時間設定のための調整は、今のところ松田（センター職員）が行う。

教員、保護者向けの研修活動

- ・不登校、自殺予防、特別支援などに関する教職員向けの研修の企画・運営。
- ・ストレスマネジメント、不登校などに関する保護者向けの研修の企画・運営。

個別介入

下記の活動の場所はケースによって、

- ・支援センター
- ・学校
- ・自宅（自律を促す活動のみ）
- ・社教などその他
- などの中から最適な場所を選ぶ。
- ・保護者への対応が、
 - なかなか学校へ行けない子どももいる、しつこく家に来るつらさをかかえる子どももいる等の保護者に対する対応が、
 - 家族3人への介入をする中で、間接的に子どもたちを「手」する。
 - 状況によって親子、夫婦、家族全体での関係での対応も検討。
 - 保護者が変わることで子どもも変わる可能性がある場面に注目。
- ・子どもへの「1対1」や「対話」が、
 - 可能な限り、「1対1」の保護者との対応が優先。保護者同様、子ども相手による個別介入も状況によって検討する。
 - 状況によっては本人に対する直接的な介入、個別介入や電話療法、職業療法、動物療法、各種療法を使った対応を行う。
 - 保護者と表現できそうな子どもであれば、真意による対応を行う。
- ・自律を促す活動
 - その子の興味に合わせた各種身体活動などを通して、なるべく外に出て家族以外の人と話す機会を持つ。
 - 遠くから「楽しい」「のびたい」という気持ちを見届けたら、「達成感」を得る経験。
 - 外に出て多くことによる体力維持。
 - 数学（算数）、英語、漢字などの基礎的な学習活動を通して、「学ぶ喜び」を味わう。
 - 基礎的な学習活動を通して、放課後の学力向上の負担軽減を目指す。

アセスメント

・通常学級における支援が必要な児童・生徒のアセスメント

→サポートミーティングによって必要とされたケースをアセスメント

・読み書きスクリーニング検査（小学校）

→小2 後半～小3 前半に、全体に対する「読み書き」スクリーニング検査を行う（小1 に行うやり方もあり現在リサーチ中）

→スクリーニング検査の結果を受けて、必要に応じて精査する

→必要に応じて個別介入（ビジョントレーニング、音韻処理のトレーニング、ブライントタッチの練習など）を行う

・クラスの状況の把握

→QU 検査（WEB 版？）を実施。担任の先生方と児童の様子を共有

→小中連携プログラムの一環として、新中1 生のクラス編成に生かす

・就学時健診等の未就学児のアセスメント

→発達支援センター通所の年長児、2 次検査における WISC など

→必要に応じて発達支援センター年中児の新版 K 式

→各子ども園や発達支援センターにおける行動観察および情報交換・コンサルテーション

・特別支援やことばの教室に在籍している小6 児のアセスメント

→中学における支援の方向性の参考にするために、病院等で検査を受けていない児童を対象にする

Mina Mina
上富良野町教育支援センター
上富良野町教育委員会 第6版 2024年10月 ver.6

関係機関とつながる活動

アセスメント

- ・通常学級における支援が必要な児童・生徒のアセスメント
 - サポートミーティングによって必要とされたケースをアセスメント
 - ・読み書きスクリーニング検査（小学校）
 - 小2 後半～小3 前半に、全体に対する「読み書き」スクリーニング検査を行う（小1 に行うやり方もあり現在リサーチ中）
 - スクリーニング検査の結果を受けて、必要に応じて精査する
 - 必要に応じて個別介入（ビジョントレーニング、音韻処理のトレーニング、ブライントタッチの練習など）を行う
 - ・クラスの状況の把握
 - QU 検査（WEB 版？）を実施。担任の先生方と児童の様子を共有
 - 小中連携プログラムの一環として、新中1 生のクラス編成に生かす
 - ・就学時健診等の未就学児のアセスメント
 - 発達支援センター通所の年長児、2 次検査における WISC など
 - 必要に応じて発達支援センター年中児の新版 K 式
 - ・特別支援やことばの教室に在籍している小6 児のアセスメント
 - 中学における支援の方向性の参考にするために、病院等で検査を受けていない児童を対象にする

集回への直接介入

- ・サポートグループアプローチ
 - 友人からのサポートが有効と思われる小学生への介入
 - 必要に応じて友人、保護者、担任、発達教諭等と協力で行う
- ・WOWW プログラム
 - 「いいとこ探し」や「スケーリング」を利用した小学校のクラス全体への介入
 - 小6 に行う場合は、小中連携プログラムの一つとして行う
 - 必要に応じて担任と協力で行う
- ・心理教育
 - 保護者の先生方と協力して、小中、それぞれの学年（クラス）における心身教育的な活動の企画・実施（発達教諭と共同）
 - 小学校から中学校まで一貫したプログラムを作成し、先生方の活動後プログラムとして引き継がれるような形を作る

子どもを中心とした信頼できる「つながり」

サポートミーティング →小学校

サポートミーティングにて情報の整理

- ★1～2 回の月例会（学級の状況に合わせて実施）
- ★特別支援 Co と支援センター職員、その他関係者（必要に応じて）でサポートミーティングをする
- ★実際の状況をもとに検討する
- ★下記のように情報を整理、必要に応じて支援センター職員が担任に話しかけて関係者に情報共有して報告する
- ① 担任が特別支援 Co に送っているケースを確認
- ② 特別支援 Co が認めるケースをサポートミーティングで検討
- ③ 必要に応じて、7/13/16、約4/16が、行動観察等の検討を検討
- ④ 必要に応じて、7/13/16、約4/16に合わせた配慮や工夫
- 支援シートの工夫
- 支援関係の書籍を、学校、支援センター、教育委員会等で共有のもの共有できるように工夫できないか
- 教室での合図や配慮等の検討
- 担任の先生や保護者と関係が深まるための検討
- 探みか女子、探みか男子、登校をしがちな子どもに対する個別介入の検討も必要

関係者面談（仮名称） →中学校

関係者面談（仮）にて選択版の整理

- ★年度内年度計画 20 日～30 日頃（1/1 の状態に合わせて進捗調整）に実施。高学年学校になりそうなケースが対象
- ★保護者、担任の先生、支援センター職員、その他必要に応じて関係者（必要に応じて）が1 時間程度の関係者面談（仮名称）を行う
- ※会議の中では、
 - ★「学校に転校から放課後まで全部行く」以外の取りうる選択肢を整理する
 - ★学校に転校する選択肢については、今まで通り各学年や学年、通塾、保健室等、学校でできることを、学校の先生が関係者に伝える
 - 支援センター、その他についての選択肢は担任（年少）職員が関係者説明する
- ★必要に応じて（担任の先生や保護者が希望すれば）、関係者等に関係者面談を開いて経過を聞く
- ★関係者面談であげられた選択肢については、保護者の判断でサポートミーティングを見計らって保護者に伝える
- ★部活などの先生の都合や保護者の仕事の都合等で時間がかかれない場合は、学校は学校で、支援センターは支援センターでそれぞれ別の選択肢を別々に保護者に説明する
- ★関係者面談の時間調整のための調整は、今のところ担任（年少）職員が行う

教員、保護者向けの研修活動

- ・不登校、自殺予防、特別支援などに関する教員向けの研修の企画・運営
- ・ストレスマネジメント、不登校などに関する保護者向けの研修の企画・運営

個別介入

下記の活動の場所はケースによって、

- ・支援センター
 - ・学校
 - ・自宅（自律を促す活動のみ）
 - ・社教などその他
- などの中から最適な場所を選ぶ

保護者へのかかわり

- なかなか学校へ行けない子どもたち、しつこく「休ませろさ」をかかえる子どもたち等の保護者に対するかかわり
- 家庭への介入をすることで、関係的に子どもたちを「助」す
- 状況によって親子、夫婦、家族全体での合同でかかわりすることも検討
- 保護者が変わることによって子どもが変わることが多い事例に着目

子どもへのアイトレやかかわり

- 可能な限り、上記の保護者のかかわりが優先。保護者担当、子ども担当による併行した介入も状況によって検討
- 状況によって子ども本人に対する直接の介入、アイトレや音韻療法、書写統合療法、動作療法、各種技法を使った介入を行う
- 言語で表現できそうな子どもであれば、職員によるかかわりを行う

自律を促す活動

- その子の興味に合わせた各種身体活動を通して、なるべく外に出て家族以外の人がサポートを持つ
- 誰かと一緒に「変身し」「やりたい」いう気持ちを読み取ること「運動」を促す
- 外に出て歩くことによる体力増進
- 数学（算数）、英語、漢字などに関する学習活動を通して、「学ぶ喜び」を味わう
- 経済的な学習活動を導入し、自給自足の学習活動を目指す

個別的介入

下記の活動の場所はケースによって、

- ・支援センター
- ・学校
- ・自宅（自律を促す活動のみ）
- ・社教などその他

などの中から最適な場所を選ぶ。

保護者へのかかわり

→なかなか学校へ行けない子どもたち、いわゆる“生きづらさ”をかかえる子どもたち等の保護者に対するかかわり。

→家族私生活への介入をすることで、間接的に子どもたちをサポートする。

→状況によって親子、夫婦、家族全体での合同でかかわりすることも検討。

→保護者が変わることでも子どもが変わることが多い事実に着目。

子どもへのアレイビティ-やかかわり

→可能な限り、上記の保護者とのかかわりを優先。保護者担当、子ども担当による並行した介入も状況によって検討する。

→状況によって子ども本人に対する直接的な介入。アレイビティ-や芸術療法、感覚統合療法、動作法等、各種技法を使ったセッションを行う。

→言語で表現できそうな子どもであれば、言葉によるかかわりを行う。

自律を促す活動

→その子の興味に合わせた各種体験活動などを通して、なるべく外に出て家族以外の人と話す機会を持つ。

→誰かと一緒に「楽しい」「やりたい」という気持ちを味わったり、「達成感」を得る経験。

→外に出て歩くことによる体力維持。

→数学（算数）、英語、漢字などの基礎的な学習活動を通して、「学ぶ喜び」を味わう。

→基礎的な学習活動を通して、復帰後の学力面での負担軽減を目指す。

MinaMina 上富良野町教育支援センター
上富良野町教育委員会 第6版 2024年10月 ver.1

関係機関とつながる活動

アセスメント

- ・通常学級における支援が必要な児童・生徒のアセスメント。
 - サポートミーティングによって必要とされたケースをアセスメント。
 - ・読み書きスクリーニング検査（小学校）
 - 小2後半～小3前半に、全体に対する「読み書き」スクリーニング検査を行う（小1に行ったりの方もあり現行リサーチ中）。
 - スクリーニング検査の結果を受けて、必要に応じて精査する。
 - ・必要に応じて個別介入（ビジョントレーニング、露頭訓練のトレーニング、ブレインドタッチの練習など）を行う。
 - ・クラスの状況の把握
 - QU検査（WEB版？）を実施。担任の先生方と児童の様子を共有。
 - 小中連携プログラムの一環として、新中1生のクラス編成に生かす。
 - ・就学時健診等の未就学児のアセスメント
 - 発達支援センター・通所の年長児、2次検査におけるWISCなど。
 - 必要に応じて発達支援センターで年中児の新版K式。
 - ・各子ども園や発達支援センターにおける行動観察および情報交換・コンサルテーション
 - ・特別支援やことばの教室に在籍している小6児のアセスメント
 - 中子における支援の方向性の参考に、情報交換検査を受けていない児童を対象にする。

サポートミーティング

→小学校

サポートミーティングにて情報の整理

- ★1～2回の自校会（学級の状況に合わせて実施。必要に応じて）でサポートミーティングをする。
- ★定期的な情報も参考に検討する。
- ★下記のように情報を整理。必要に応じて支援センター職員が担任に話しかけて関係機関に情報共有して精査する。
- ① 担任が特別支援 Co に属しているケースを相談。
- ② 特別支援 Co が認めないケースをサポートミーティングで検討。
- ③ 必要に応じて、7/13/16、約2週間、行動観察等の対話を検討。
- ④ ③をふまえて子どものニーズに合わせた配慮や工夫。
- 支援シート作成の工夫。
- 支援関係の書籍を、学校、支援センター、教育委員会等で共通のもの共有できるように工夫できないか？
- 教室での合理的配慮等の検討。
- 筆記用具、補助具や教材、基礎の配置、漢字の覚え方、表のかけ方などの工夫。
- 担任の先生や保護者と可能な配慮や工夫の検討。
- 探みかたや字、探んでいる字、登校をしる子どもに対する個別介入の検討も行う。

関係者面談（仮名称）

→中学校

関係者面談（仮）にて選択版の整理

- ★年度内実施回数20日～30日程度（1回の状態に合わせて適宜調整）に実施。高学年が中心になりそうなケースが対象。
- ★保護者、担任の先生、支援センター職員、その他必要に応じて関連機関関係者が1時間程度の関係者面談（仮名称）をする。
- ※会議の中では、
 - 「学校に動かしきれないまま」以外の取りうる選択肢を整理する。
 - 学校に動かしきれない状態については、今まで通り各学年や担任、通所、保健室等、学校でできることを、学校の先生が発表する。
 - 支援センター、その他についての選択肢は松田（仮）職員が発表説明する。
- ★必要に応じて（担任の先生やご家族が希望すれば）、長期休み等に関係者面談を開いて経過を察す。
- ★関係者面談であげられた選択肢について、保護者の側でタイムリングを見計らって保護者が本人に伝える。
- ★部活などの先生の都合や保護者の仕事の都合等で時間がない場合、学校は学校で、支援センターは支援センターでそれぞれ別の選択肢を別々に保護者に説明する。
- ★関係者面談の時間調整のための調整は、今のところ松田（仮）職員が行う。

集回への直接介入

- ・サポートグループアプローチ
 - 中子からのサポートが有効と思われる小学生への介入。
 - 必要に応じて友人、保護者、担任、発達教師等と協力して行う。
- ・WOWWプログラム
 - 「いいとこ探し」や「スクリーニング」を利用した小学生のクラス全体への介入。
 - 小6に行う場合は、小中連携プログラムの一つとして行う。
 - 必要に応じて担任と協力して行う。
- ・心理教育
 - 発達教師等と協力して、小中、それぞれの学年（クラス）における心理教育的な活動の企画もつくる（発達教師と共同）。
 - 中子からの支援を受けて書いたプログラムを作成し、先生方の活動後プログラムとして引き継がれるような形を作る。

教員、保護者向けの研修活動

- ・不登校、自殺予防、特別支援などに関する教員向けの研修の企画・運営
- ・ストレスマネジメント、不登校などに関する保護者向けの研修の企画・運営

個別的介入

下記の活動の場所はケースによって、

- ・支援センター
- ・学校
- ・自宅（自律を促す活動のみ）
- ・社教などその他

などの中から最適な場所を選ぶ。

保護者へのかかわり

→なかなか学校へ行けない子どもたち、いわゆる“生きづらさ”をかかえる子どもたち等の保護者に対するかかわり。

→家族私生活への介入をすることで、間接的に子どもたちをサポートする。

→状況によって親子、夫婦、家族全体での合同でかかわりすることも検討。

→保護者が変わることでも子どもが変わることが多い事実に着目。

子どもへのアレイビティ-やかかわり

→可能な限り、上記の保護者とのかかわりを優先。保護者担当、子ども担当による並行した介入も状況によって検討する。

→状況によって子ども本人に対する直接的な介入。アレイビティ-や芸術療法、感覚統合療法、動作法等、各種技法を使ったセッションを行う。

→言語で表現できそうな子どもであれば、言葉によるかかわりを行う。

自律を促す活動

→その子の興味に合わせた各種体験活動などを通して、なるべく外に出て家族以外の人と話す機会を持つ。

→誰かと一緒に「楽しい」「やりたい」という気持ちを味わったり、「達成感」を得る経験。

→外に出て歩くことによる体力維持。

→数学（算数）、英語、漢字などの基礎的な学習活動を通して、「学ぶ喜び」を味わう。

→基礎的な学習活動を通して、復帰後の学力面での負担軽減を目指す。

集団への直接介入

・担任の先生や保護者と可能な配慮や工夫の検討
休みがちな子、休んでいる子、登校をしづる子などの検討も含む

・サポートグループアプローチ

→友人からのサポートが有効と思われる小学生への介入
→必要に応じて友人、保護者、担任、養護教諭等と協力して行う

・WOWWプログラム

→「いいところ探し」や「スケーリング」を利用した小学生のクラス全体への介入
→小6に行く場合は、小中連携プログラムの一つとして行う
→必要に応じて担任と協力して行う

・心理教育

→保健室の先生方と協力して、小中、それぞれの学年（クラス）における心理教育的な活動のシステムをつくる（養護教諭と共同）
→小学校から中学校まで一貫したプログラムを作成し、先生方の転勤後もプログラムとして引き継がれるような形を作る

Ⅲ. 自分らしさを取り戻していく過程 ～学校に戻すことが目的ではない～





「こんな居心地が良いと、学校に戻れなくなるのでは？」
私の視点からは、このような発想は生まれてこない。

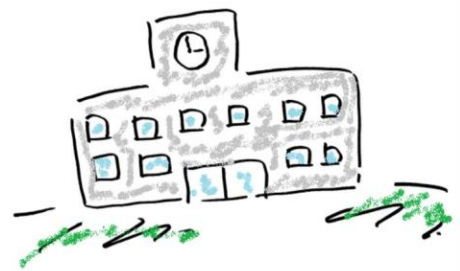
決して学校に通えるようになることを目的にしていない。
安心、安全で自分らしくいられる居場所を提供することで、
元気になることが重要であると考えている。

学校に行けるものなら行きたいと思っている子がほとんどで、
その子らしさを取り戻すと、学校に戻れる状態の子は
自ら戻っていく子も多い…そんな印象だ。



実際、MinaMinaに通っていて、
学校に戻る子がたくさんいる。
曜日や時間帯によって
学校とMinaMina両方に通っている子たちもいる。
みんなそれぞれの思いでそうしているだけ。

子ども達と接する上で、
根幹となるこれらの考え方の違いは、
大人側がはっきりと意識するべきだと
私は思っている。

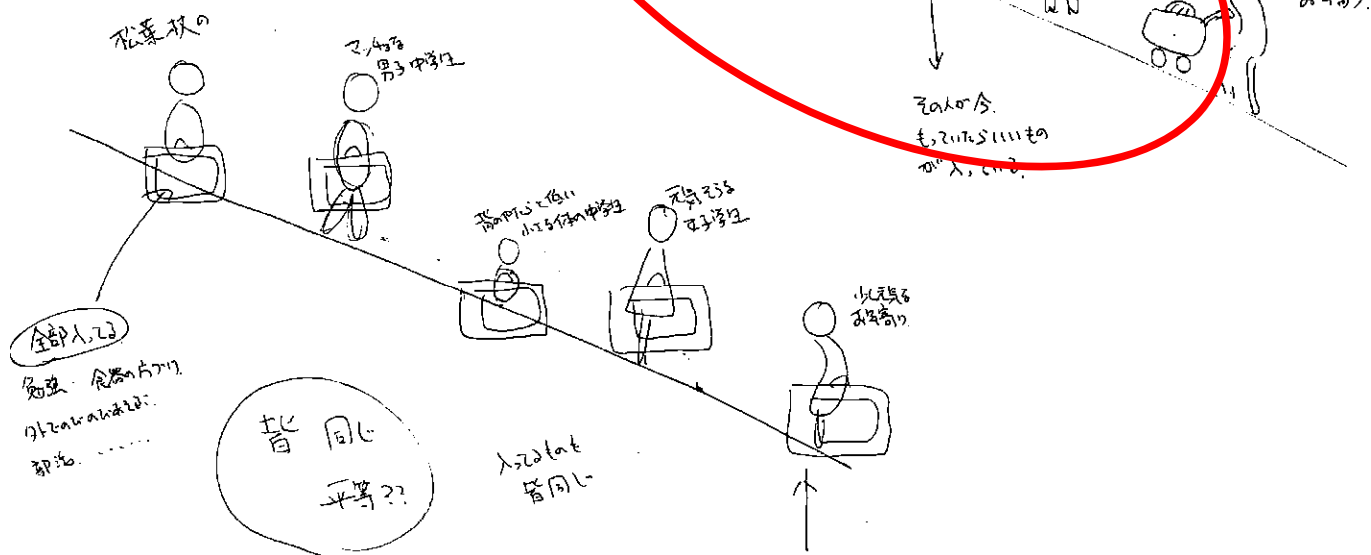


「怠学」という言葉. . .



将来(頂上で)どうしても必要だ
と思われるものを持つ

どちらの平等??



それぞれの場所に合った形の、
“人のつながり” ができれば…と切に願います。

ラベトン

見学等、随時受け入れております。
興味のある方は
ぜひお気軽にお問合せください。



2時間程度のお時間をいただければ、
「なぜか学校に行けない子どもたち」
～不登校状態に関する支援の方法と考え方について～
という講演会をさせていただくこともできます。
不登校状態に関する支援をしたいということであれば、
まず、それがどういうことなのかを知る必要があるはずです。

見学、研修会、講演会等のご依頼は：
(下記の両方にメールしていただいた方が確実です。)

happytakeshi@hotmail.com

または

matsuda-t@town.kamifurano.hokkaido.jp

電話： **0167-45-1366**

教育支援センターMinaMina

松田 剛(マツダタケシ) までお気軽にお問い合わせください。



ありがとうございました。